

詩篇119篇33～40節

- 33 主よ、**あなたのおきて**の道を私に教えてください。そうすれば、私はそれを終わりまで守りましょう。
- 34 私に悟りを与えてください。私は**あなたのみおしえ**を守り、心を尽くしてそれを守ります。
- 35 私に、**あなたの仰せ**の道を踏み行かせてください。私はその道を喜んでいきますから。
- 36 私の心を**あなたのさとし**に傾かせ、不正な利得に傾かないようにしてください。
- 37 むなしいものを見ないように私の目をそらせ、**あなたの道**に私を生かしてください。
- 38 **あなたのことば**を、あなたのしもべに果たし、あなたを恐れるようにしてください。
- 39 私が恐れているそしりを取り去ってください。**あなたのさばき**はすぐれて良いからです。
- 40 このとおり、私は、**あなたの戒め**を慕っています。どうかあなたの義によって、私を生かしてください。

הֲרִנִי יְהוָה דָּרֶךְ חֻקֶיךָ וְאַצְרֶנָּה עֲקֵבֶיךָ
הֲבִינִנִי וְאַצְרֶה תּוֹרֹתֶיךָ וְאַשְׁמְרֶנָּה בְּכָל־לֵב
הֲדַרִּיכֵנִי בְּנֹתֵיב מִצְוֹתֶיךָ כִּי־בוֹ תִפְצְּתֵנִי
הֲטַלְבִּי אֶל־עֲדוֹתֶיךָ וְאֶל־אֵל־בְּצַעֲךָ
הֲעֵבֶר עֵינַי מִרְאוֹת שָׁוָא בְּדַרְכֶּךָ תִּינִי
הֲקִם לְעַבְדֶּךָ אִמְרֹתֶיךָ אֲשֶׁר לִירְאָתֶךָ
הֲעֵבֶר חֲרַפְתִּי אֲשֶׁר יִגְרַתִּי כִּי מִשְׁפָּטֶיךָ טוֹבִים
הִנֵּה תִאֲבָתִי לְכַקְדִּיךָ בְּצַדִּיקְתֶּךָ תִּינִי

「私に教えてください」(הֲרִנִי/ホーレーニー)。今日の箇所はこのことばでもって始まります。幼い頃から御言葉を聞き続け、親に教えられ、暗記し、書き記し、このような技巧的な大長篇を残すに至ったこの詩人が、尚も主に教えを乞うているのです。いえ、どんなに知識があっても、どれほどの経験を重ねたとしても、日々主に教えていただかなくては、きょう何を語り何を行なうべきかが分からなかったのでしょうか。来る朝ごとに初心に帰り、この日をどう生きるべきかを神様に問い続けていたのです。

第五字「ヘー」です。一文字ずつヘブル語アルファベットを辿りながら119篇を学んでみますと、おそらくこれほどの長篇は一日で一挙に書いたのではないだろうと想像できます。私たちが共に学んでいるように、一日一文字、八行ずつ綴っていったのではないのでしょうか。詩人は思い巡らしながら、きょう主が語ってくださる「新しいことば」を聞き取ろうとしたのです。「主よ、教えてください」と。まるで純粋な少年のように御言葉を吸収し続けるこの詩人の姿は、まさに主イエスが弟子たちに語られた「子どものように神の国を受け入れる者」(マルコ 10:15) でありました。

「ה」で始まる言葉の整理をしておきましょう。

「הורני / ホーレーニー」…私に教えてください

「הביני / ハビーネーニー」…私に悟り（洞察、理解）を与えてください

「הדריקני / ハドリーケーニー」…私に踏み行かせてください

「הטלבי / ハト・リビー」…私の心を傾けてください

「העבר / ハアベール」…過ぎ去らせる

「הקים / ハーケーム」…成就する、確証する

「הנה / ヒンネー」…見よ

「教えてください」と求めた詩人は、教わったことを「終わりまで守る」（33節）、しかも「心を尽くして守る」（34節）と誓います。マラソンで五輪金メダルを獲った高橋尚子さんは小出義雄さんという名指導者に直談判して教わったといいます。彼女が指導を受けるにあたって、どこまでも素直であろうと心に決めていたというのは有名な話です。この詩人が主の教えに聞き従おうとするところには、彼女の姿勢と何か通ずるものを感じます。素直な人は伸びるのです。

この詩人のもう一つの特徴は、主の仰せの道を「喜んでいる」ということでしょう。厭々聞き従うのではない。御言葉を学ぶのが楽しくて仕方がないのです。今日はどんな発見があるだろうかとワクワクしながら聖書を開くのです。私たちは毎週どんな気持ちで教会へ足を運んでいるでしょうか。奉仕への緊張感ばかりが頭にあるかもしれません。しかし、むしろ開かれる御言葉を通して何が自分に語りかけられるのだろうかという期待感を持って礼拝に臨みたいものです。語る者も聞く者も共に同じ御言葉を聞いているのです。

詩人が願い求めていることで私たちも心に留めるべきは、「不正な利得に傾かないように」（36節）、「むなしいものを見ないように」（37節）ということです。時に、金銭的誘惑が詩人の心をよぎったのでしょうか。しかし、彼はそこに目を向け始めると追求に終わりがないうことを知っていました。むしろ、主の御言葉という宝に目を向ける時、必要なものは向こうからやってくるということを信じて生きていたのです。

38節と39節では「恐れ」（היראה / イルアー）、「恐れる」（ירג / ヤーゴール）ということばが繰り返されますが、この二つの節から詩人の中の葛藤が読み取れます。彼は何者かによる「そしり」を恐れていたのですが（39節）、真に恐れるべき主のことばに心を向けようとしていました。人の言葉は不確かであり、移りゆくもので、いくらでも変更があり得ます。しかし、神のことばはとこしえに変わることがありません。惑わされず、真理に立ち続けることが大切なのです。

神のことばを「慕い求める」思いを込めて、今日の箇所は締め括られます（40節）。神の正義、神の裁き、それこそが詩人の唯一の拠り所でした。

最後に、説教者として日々経験していることを分かち合わせていただきます。人によって違うかもしれませんが、私にとっては御言葉を学ぶべき時間帯は午前中だと感じる人が多いです。やりたい仕事や趣味はあれこれあるのですが、他の何を置いても御言葉を第一としていくとき、形容しがたい魂の満たしを受けることができます。その力に押し出されるようにして午後も活動的に働き、平安な夜を迎えることができます。私たちが第一とすべきものが何であるか、日々心に問うて歩み出したいと思います。